禅の友

Zen no Tomo

4

April 2024

ご本山だより

大本山永平寺【初めての転役（てんやく）】

今年の春の上山者たちが永平寺にやってきてから一ヵ月ほどが経ちました。その頃、境内に積もっていた雪はほとんど溶け、木々には新緑が芽吹き花も咲いています。

建物の中はまだまだ肌寒いですが、作務（さむ）の為に外に出ると、温かい日差しとさわやかな春の風を身体いっぱい受けることができます。この時、修行の緊張と寒さからくる体のこわばりがほぐれ、久しぶりに穏やかな気持ちになったことを筆者も思い出します。

この時期に修行生活の中でも最も印象的な経験をします。それは、はじめての転役です。

永平寺にはいくつかの部署があり、修行僧たちは必ず何かしらの役割をいただきます。永平寺では部署のことを寮舎（りょうしゃ）、役割のことを配役（はいやく）と言います。寮舎が変わり、新たに配役をいただくことを転役と言います。

上山した修行僧たちは初めに衆寮（しゅりょう）という寮舎に入り鐘洒（しょうしゃ）という配役をいただきます。

衆寮では、坐禅をし、法要などの行事に参加し、鐘をつき掃除をするという永平寺の生活の基本的な作法を身に付けます。その後、それぞれが各寮舎に転役をします。どの寮舎に転役になるのかはその時になってみなければ分かりません。包丁をもった経験がなくても、仏さまと修行僧の食事を作る大庫院（だいくいん）という寮舎に転役すれば、ひたすらに料理を作らなければなりません。人前で話すことが苦手でも、布教参禅係という寮舎に転役すれば、参拝にいらっしゃった一般の方の前で、大きな声で永平寺の伽藍（がらん）の説明をしなければならないのです。

修行道場での慣れない生活をしている上に、永平寺の一員として配役を全うする責任も負うことになります。何度も失敗し悩む中で、修行とは何だろう、どうして自分はこのようなことをしているのだろうと、自分自身と深く向き合うことになるのです。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより
大本山總持寺

【本山開祖・太祖常済大師
瑩山紹瑾禅師　七百回大遠忌奉修】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

社会では新年度がスタートする四月。身も心も清々しい気分で新しい世界に飛び込んで行く人も少なくはないでしょう。

總持寺ではいよいよ五十年に一度の大法要が勤まります。それ故、五十年前にこの法要に会われた方も初心に帰り、歓喜の思いが込み上げて来るのではないでしょうか。

瑩山禅師の教えは七〇〇年の時を超えて私たちに呼びかけ、その足音さえもハッキリと聞こえてくるのです。『坐禅用心記』には「常に大慈大悲に住して、坐禅の無量の功徳を一切の衆生に回向せよ」の教えがあります。つねに人々に寄り添い共に幸せを願い、苦しみを共にすることを示しています。

これは『宝慶記（如浄禅師が日々に教えられたことを纏めた記録）』の中に「大悲を先にする坐禅」があり、道元禅師に伝えられた正伝の仏法を継承されている証だと推察されます。また瑩山禅師の母である懐観大姉からの観音信仰の影響によるものとも言えるのかもしれません。

ご承知のように元日に襲った大地震により石川県はもとより隣県まで及ぶ被害が出ました。

まだまだライフラインさえ充分に復旧しない中、復興に向けて一歩ずつ踏み出している最中のこの法要でありますが、瑩山禅師の御心とお示しである人々の安寧と幸福、そして復興を願ってこの法要を勤めなければならないと思っております。

曹洞 俳壇

選・坊城 俊樹

大時計ゆつくり振子去年今年

東京都　鈴木 英治

評　去年今年という季題は新年になって去年を懐古するもの。今までは普段のゆったりとした時間が流れていたが今年の日本の正月には大変なことが立て続けに起こった。しかしこの大時計は何事もなかったように悠久の時を刻んでいる。それもまた感慨。

誰よりも出番短き聖夜劇

北海道　中西 千晶

評　これは母や祖母から見た幼稚園のクリスマスの劇の子のことだろう。私にも記憶があるが我が子の出番はほんのちょっと。しかも口バの役柄。この子もまた出番が短かったのだろう。しかしそれを見守る親にとっては永遠の記憶に残る主人公なのである。

◆寒林の中の常磐木揺れ止まず　愛媛県　井上 征郎

◆たぎる湯の音を鎮めて初点前　埼玉県　新藤 共子

◆子の独楽の紐巻き直し父夢中　岐阜県　大下 雅子

◆我が身には違ふ寒さの坐禅堂　鳥取県　眞山 博充

◆捨犬を抱くがごとく山眠る　島根県　金山　陽

◆閉校のぶらんこ風にきしみ泣き　青森県　赤坂 昇吾

◆古里に佇めば吾も枯野人　北海道　保浦 悦二

◆加湿器や時の止まりし黒電話　埼玉県　伊藤　博

◆雪の夜や子等に昔の物語　鳥取県　徳本 義則

◆沖の雲かき分け冬日たくましき　三重県　苅屋 奈良美

選者吟

太宰府は一千年の枯野へと

俊　樹

作句小見　九州は太宰府の都府楼の跡へ行ってきた。一〇〇〇年前の役所の跡である。そこには虚子の「天の川の下に天智天皇と臣虚子と」という句碑が立つ。これは有名な句で子孫としてはそれを踏まえた上での句を作りたかったのだが、まあ役者が違った。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

雪積る気配に目覚め想いおり去年の寒夜に逝きたる妻を

岩手県　宍戸 さとる

評　亡き妻を偲ぶしみじみとした情感が、深夜に積もりゆく雪の気配に託され味わい深い一首である。坦々と詠われているだけに喩えようもない深い思いを受け止めることが出来る。

高く長く笛吹くように鳴く鳶の姿もとめて青空仰ぐ

山口県　橋本 美知子

評　朗らかな気持ちの良い詠いぶりの一首。軽快に「く」の音を響かせた後、つづく結句の「青空仰ぐ」が、平凡なようで場を得た措辞である。鳶は何処にでもいるさして珍しくもない鳥なのにこの歌ではヒーローとして収まっている。

◆掃き清められし参道初詣の一歩一歩よまだ生きて在る　兵庫県　前田 あつ子

◆雲ひとつ無き元朝の海空に掌を合わせ深くふかく息吸う　静岡県　杉原 民子

◆寒行の団扇太鼓の高鳴りて凍みたる小路の土を踏みくる　岩手県　阿部 凞子

◆歌いつつねぎを切りいる今朝の妻うれしきことのあるをわれ知る　鳥取県　徳本 義則

◆薄き日の窓辺に射せば寄りゆきて猫と並んで往来ながむ　山口県　濱田 道子

◆長靴の三馬のマークは街の貌　昭和の冬の深き足跡　北海道　菅原 三江子

◆残業の娘の帰り待つ鍵掛けず食卓前に居眠りしつつ　青森県　赤坂 昇吾

◆履くことの無き靴なれど捨てられず月に一度は朝みがくなり　静岡県　髙尾 善五

◆飼い犬の死を悲しみし母のため仔犬の切手を選び封する　熊本県　島田 佳可

◆僧たちの白足袋映えて所作続き大般若会に春を呼び込む　岡山県　塚本 登志子

選者詠

噴水と並んで撮れば高くたかく伸びするこころ生まれてきたり

ちづ

作歌小見　前田さん、杉原さん共に新玉の年を迎え厳粛な清々しさの中に新年を言祝ぐ思いが籠ります。混じり気のない措辞が凛とした一首にしています。能登半島沖の地震は、その日の夕刻の出来事、一日も早い復興をと心からお祈りします。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。